

## 尹致昊と朝鮮の近代：東アジアにおける知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール

著者	柳 忠熙
学位授与年月日	2016-11-24
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00075394">http://doi.org/10.15083/00075394</a>

博士論文（要約）

尹致昊と朝鮮の近代

——東アジアにおける知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール

柳忠熙

序章 近代東アジア／朝鮮の知識人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

一、啓蒙思想と近代東アジアの知識人エトスの変容 1

二、本稿の研究対象と問題提起 5

    ― 近代朝鮮知識人・尹致昊に関する総合的理解

    (一) 尹致昊の生涯 5

    (二) 先行研究検討および問題提起 8

    (三) 本論の構成 12

第一部 朝鮮知識人と西洋体験

第一章 尹致昊の海外経験と英語学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

    ― 東アジアの辞書学と朝鮮知識人の英語リテラシー

一、朝鮮知識人の英文日記 20

二、尹致昊の日本留学と英語学習 23

    (一) 日本語学習と漢学的素養 23

    (二) 英語学習と言語の重層性 31

三、近代東アジアにおける対訳辞典と尹致昊の英語学習 34

    (一) 漢文脈と欧文脈との接合 34

        ― 英和(和英)・英華(華英)辞典

    (二) 漢文脈からの離脱／欧文脈への参入の経験 38

        ― アメリカ留学とウェブスター辞典

四、異言語空間の経験と国文の可視化の問題 41

五、小結―朝鮮知識人の英語リテラシーと近代朝鮮語 45

第二章 漢詩文で〈再現〉された西洋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

    ― 『海天秋帆』『海天春帆小集』『環瑠唼艸』と理想郷の修辞

一、ニコライ二世戴冠式祝賀使節団と複数の記録 53

二、理想郷の修辞法と西洋 57

三、閔泳煥と金得鍊の異なる作詩の意図 63

四、小結―西洋体験の再現と朝鮮後期における漢文脈の複層的多様性 67

第三章 英文で〈再現〉された西洋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74

―「日記」に記されたヨーロッパと朝鮮使節の文化的ダイナミズム

一、ニコライ二世戴冠式祝賀使節団と英文記録 74

二、西洋文化の教養によるヨーロッパ紀行文 78

(一) 驚異の空間としての西洋の近代都市―ニューヨークとロンドン 78

(二) 文明国の位階―ロシアへの比較文明的な眼差し 82

三、混在する東洋／西洋文化の教養 87

(一) 使節団の不和の原因―東洋／西洋文化の教養による衝突 87

(二) 使節団の不和の展開―通訳をめぐる葛藤 91

(三) 使節団の和解の様相―漢詩贈答という漢字圏のコミュニケーション 95

四、小結―異なる教養の差異の混在とその〈再現〉 101

第二部 尹致昊の政治思想の変容と自由思想

第四章 尹致昊の改革と啓蒙の論理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108

―主権をめぐる政治思想の変容

一、尹致昊の政治思想の軸―「政府」「教育」「宗教」 108

二、主権意識の変化と西洋経験―初期官吏時代／海外亡命期 112

(一) 仁政の政治的想像力と君権―仁政の理想と朝鮮の現実との乖離 112

(二) 新しい民の可能性と教育―仁政的教化から啓蒙的教育へ 118

(三) 人民啓蒙と宗教―キリスト教の有効性と儒教の無効性 123

三、政府改革と人民啓蒙の構想―甲午改革期／独立協定期 130

(一) 日清戦争と朝鮮改革への構想―〈安民〉思想の変容 130

(二) 独立協会の人民啓蒙と議会設立運動―君権への牽制と民権への志向 138

四、小結―君権と民権のはざまに生きる知識人の政治的想像力 148

第五章 尹致昊の啓蒙思想とキリスト教的自由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160

―福沢諭吉の自由観と宗教観の比較を通じて

一、尹致昊と明治日本の啓蒙思想 160

二、宗教の功利性と信仰 164

(一) 福沢諭吉の功利主義的宗教観と無信仰的態度 164

(二) 尹致昊の功利主義的宗教観とキリスト教信仰 167

三、自由の想像力―キリスト教的自由と文明論 171

(一) 近代の自由観とキリスト者の自由 171

(二) 物理学的世界観と知性の文明論 175

(三) キリスト教国家への認識と救済の想像力 177

四、小結―個人の自由への信仰と東アジアの近代	181
第三部 朝鮮の近代と啓蒙のエクリチュール	
第六章 朝鮮開化期の民会活動と「議会通用規則」	192
―「議会通用規則」の流通と翻訳様相を中心に	
一、近代討論文化の形成と「議会通用規則」の翻訳	192
二、保護国期の「議会通用規則」の流通と民会設立ブームとの関連性	195
三、「議会通用規則」が語る翻訳者の意図	201
(一) <i>Robert's Rules of Order</i> の日本語翻訳―『官民議場必携』の翻訳	201
(二) 公共意識の理解と実践の場としての民会―「議会通用規則」の翻訳	206
四、小結―「議会通用規則」の残影	214
第七章 自助論の政治的想像力と三・一運動	223
―一九一〇年代後半における尹致昊と崔南善の自助論を中心に	
一、パリ講和会議と朝鮮知識人の独立についての相反する態度	223
二、現実と理想の政治的想像力―自助論の流通と三・一運動	226
三、植民地統治権力と朝鮮知識人	230
―尹致昊の〈転向〉と自助論の現実主義的性質	
四、独立宣言書の政治的想像力	235
―崔南善の『自助論』と自助論の理想主義的性質	
五、小結―自助論の両面性と植民地朝鮮の知識人	240
終章 近代東アジアのダイナミズムと尹致昊	252
一、本論の整理	252
二、今後の課題と展望	261
(一) 開化期の尹致昊の著作・翻訳―『笑話』と『幼学字聚』	261
(二) 植民地朝鮮と尹致昊	262
(三) 近代日本における知識人エトスの変容とキリスト教	263
〈参考文献一覧〉	266
〈付録・尹致昊(一八六五―一九四五)年譜	290
〈初出一覧〉	295

本稿では、一九世紀末から二〇世紀初めにかけての東アジアの文脈のなかで、朝鮮知識人<sup>ユン・テホ</sup>尹致昊（一八六五～一九四五）の思想と実践に関する総合的理解を試み、彼の人生と思想が、当時の東アジアにおけるトランスナショナルな文化・政治的状况によって形成され変容していたことを明らかにした。また、その東アジアのトランスナショナルリティという文脈に基づいた〈東アジア／朝鮮の近代〉のダイナミズムに注目し、近代東アジアの知識人エトスの特徴とその変容の様相についての理解を示した。

尹致昊は、一八六五年、武官<sup>ユン・ウソル</sup>尹雄烈の長男として忠清道牙山で生れる。尹は、開化期において、日本をはじめ中国とアメリカに留学し、その後朝鮮政府の開化派官僚となり、独立協会や大韓自強会などにも参加し、朝鮮の近代化と独立のために尽力した。植民地期においては、一〇五人事件（一九一二）に関わったとして投獄され出獄した後、南メソジスト派の教育者として朝鮮YMCAや延禧専門学校などに関わりながら、朝鮮人の啓蒙をはかった。だが、日中戦争の前後において日本に対して戦争協力を行った過去を持つ人物である。

本稿では、近代への転換期における東アジアの知識人エトスは、漢学的素養及び儒学的思想に基づいた士大夫層の特性と、自国語リテラシーの素養及び啓蒙思想に基づいた市民層の特性が、連携し拮抗しながら混在するなかで生じるダイナミズムを特徴とすると仮定した。開化期における尹致昊の人生と思想の形成とその変化を、近代東アジアの知識人エトスの変容の様相を示す一例として位置付けた。

尹致昊は、幼いときから科挙及第を目指しており、こうした朝鮮士大夫としての素養を持っていた。だが、尹は、海外経験を通して、キリスト教・自由思想・文明論を受け入れ、彼の人生と思想は、これらが複合的に影響し合うなかで変わっていく。「日記」には、朝鮮士大夫から啓蒙知識人へと変貌する尹致昊の様相が詳細に記されており、初期には儒学政治思想に基づいた朝鮮の為政者としての観点が見られたが、その後キリスト教徒となった彼が、過去の自分自身の思想と素養を否定していく姿を確認することができる。この過去の自己を否定する尹致昊の眼差しは、朝鮮社会ひいては東洋社会にも適用され、自由思想とキリスト教の信仰を持つ尹は、自身が属する朝鮮を啓蒙することに専念することとなる。

ところで、過去の自己に対する尹致昊の批判が可能なのは、逆説的にも、批判される過去の自身こそ、今までの自分自身の人生と思想であるという自覚によるものである。英語の習得やキリスト教への入信など、過去の自身を顧みる現在の尹致昊の思想を特徴付けるものは、欧文脈に基づいた事象と概念を、漢文脈で翻訳することで得られたものである。尹の啓蒙の実践においても、朝鮮の人々に通用する形にするためには、過去の自分自身を支えていたエトスに基づいた、こうした文化的翻訳を経ずには実現できないものである。この文化的翻訳の過程で、必然的に、士大夫のエトスと市民的エトスが拮抗し融合されて変容していくダイナミックな現象が起る。こうした尹致昊の一連の変化の様子は、近代東アジア知識人エトスのダイナミズムを想像させるものである。

以上の全体的な分析は、以下の各論の分析によって導かされたものである。本稿の本論は三章七章構成である。

第一部「朝鮮知識人と海外体験」では、第一章から第三章にかけて、尹致昊とともにミン・ヨンファン 閔泳煥やキム・ドンニョン 金得鍊に注目し、朝鮮知識人の海外体験の文化的意味を問題とした。近代化を推進していた日本をはじめとしてアメリカやヨーロッパの諸国の異文化と近代文物に接した朝鮮知識人の反応と、異文化経験が彼らに与えた影響とそれによる彼らの思想的变化を示した。

第二部「尹致昊の政治思想の変容と自由思想」では、第四章と第五章にかけて、開化期における尹致昊の思想の特徴とその変容を問題とした。朝鮮士大夫としての素養を持つ尹致昊が、海外生活のなかで、キリスト教や自由思想や文明論などを受け入れ、啓蒙知識人へ変貌していく過程と、独立協会を通じての啓蒙活動の様相を示した。そして福沢諭吉の啓蒙思想との比較分析を行い、尹致昊の啓蒙思想のキリスト教的特性を明らかにした。

第三部「朝鮮の近代と啓蒙のエクリチュール」では、第六章から第七章にかけて、東アジア／朝鮮における啓蒙思想の翻訳と自由思想の流通を問題とした。明治期における永峰秀樹の翻訳も視野に入れ、朝鮮における近代討論文化の紹介と流通の様相を示した。そして、チニナムン 崔南善の翻訳と思想との比較を通じて、一九一〇年代の植民地期朝鮮における自助論の政治的想像力の特徴を示した。

各章は尹致昊の人生の前半に当たる一八八〇年代から一九一〇年代までの時期を、通史的に構成し、尹致昊の思想的変容を時間軸に沿って把握できるようにした。第一章は、尹致昊の日本や中国やアメリカでの留学期を中心とした一八八〇年代から一八九〇年代半ばまでの時期である。第二章と第三章は、尹が朝鮮の祝賀使節としてロシアとヨーロッパ諸国を訪ねた一八九六年から一八九七年前後の時期である。第四章と第五章は、尹の初期官吏時代から独立協会活動期前後までの一八八〇年代から一八九〇年代にかけての時期である。第六章は、尹の独立協会活動期から官界から離れて人民啓蒙を中心に活動した一八九〇年代後半から一九〇〇年代にかけての時期である。最後に第七章は、韓国併合以後から三・一運動前後の時期までの一九一〇年代を時代的な背景とする。

第一章「尹致昊の海外経験と英語学習」では、尹致昊が英語学習を行なった一九世紀末の朝鮮における西洋語学習の環境を視野に入れ、彼にとっての英語学習と海外経験の様相とその意味を検討した。現在と異なる言語状況に置かれていた朝鮮語使用者である尹致昊の英語学習の分析を通じて、当時の朝鮮語と英語との言語間コミュニケーションのプロセスから、近代朝鮮語の形成のトランスナショナルリティを明らかにした。

尹致昊は一八八一年五月に紳士遊覧団の一員として来日する。これが彼のはじめての海外経験である。当時の尹は漢学の素養を持つ若き儒学者であった。当時の日本人と儒者として付き合っ

てきた尹の漢学の素養が、日本語の学習にも、そして英語という全く背景を異にする言語に接続するための媒体にもなった。日本で尹致昊が英語に接し学習することができたのは、むしろ彼が漢学的素養の持ち主だったからである。

尹致昊の英語習得は、海外への留学と旅行による異文化空間の経験と緊密にかかわっている。尹致昊の回想によれば、彼の英語学習は一八八一年に日本を訪問した時から始まった。尹致昊は、英韓（韓英）辞典ではなく、東アジアに流通していた英和（和英）辞典・英華（華英）辞典を通じて英語学習を行っていた。この事実は、尹致昊の英語学習を考えると、朝鮮語と英語との言語的交通のような、一言語対一言語という図式とは異なる理解が求められることを示唆する。

尹致昊は、アメリカ留学を通じて、日本と中国での英語教育とは異なる学習環境に置かれるようになる。彼は、アメリカ留学を通じて、日本・中国などの今まで英語学習のために利用してきた漢文脈の言語空間を離れるようになった。彼は漢文脈で思考してきた世界を離れる経験を通じて、漢文脈で思考し理解する行為を経ず、英語の欧文脈の内でも思考し学習する。彼の英語学習において、英語単一語辞典である『ウェブスター辞典』が、「英華字典」と「英和字典」の代わりに、聖書や英文学や西洋歴史書とともに彼の本棚に配置されたのは象徴的である。

尹致昊は、アメリカという欧文脈の言語空間での長期滞留を通じて、漢文脈に依存する思考を次第に相対化することになったと考えられる。そして、彼は、漢文脈の思考から離脱しつつ、漢文脈という媒体を経ず、直接に欧文脈で思考することを経験した。つまり、尹致昊のアメリカ留学は、彼に漢文脈から離脱する経験を与えることでもあったのである。

このような、漢文脈からの離脱／欧文脈への参入の経験は、朝鮮語の国文化／文字の可視化の問題に関わっている。つまり、一〇年間の海外生活後に見られる〈純国文〉への尹致昊の志向は、漢字でもって国文を可視化する論理を排除し、諺文の文字だけでもって国文を可視化する企てであり、海外生活とそこでの多様な言語経験がこのような論理を導く一因となったと言える。

第二章「漢詩文で〈再現〉された西洋」では、この使節団の旅行の記録のうち、漢詩文で書かれた閔泳煥の漢文旅行記『海天秋帆』と漢詩集『海天春帆小集』、および金得鍊の漢詩集『環璆唵艸』を分析の対象として、祝賀使節団が彼らの西洋体験、そこで彼らが体験した対象を、どのように漢詩文で〈再現〉したのかについて検討したものである。〈再現〉とは人間が経験したものを書き表す行為を意味する。本章で問題とした使節団が経験した対象を漢詩文で書き表すことはその一例だと言える。

一八九六年四月、閔泳煥を正使とする朝鮮使節団は皇帝ニコライ二世戴冠式に参加するためにロシアへと出発する。使節団は、地球を一周し、西洋諸国で汽車や電気灯などの近代文物を見聞き、西洋式の戴冠式に参加するなど、それまで経験したことのない光景に遭遇する。

閔泳煥と金得鍊は、上海・東京・ニューヨーク・ロンドンのような近代的な都市空間を、彼らの書記体系である漢詩文で〈再現〉することの難しさを告白する。興味深いのは、こうした告白が存在するにもかかわらず、彼らが『海天秋帆』『海天春帆小集』『環璆唵艸』のような旅行記録



を書き残し得た事実である。彼らは、漢字圏の〈理想郷〉の概念を利用することによって、表現の限界を乗り越える。例えば、『海天秋帆』におけるニューヨークは、「町がにぎやかで人や車の往来が激しく、日夜絶えず、笛の音に歌の声と遊び楽しむことが一年中やまない。長春園の内は愁いの無い地と謂うべきであり、不夜城の中は極楽天である」と「極楽天」に喩えられる。

関泳煥の漢詩と金得鍊のそれには、西洋を〈再現〉する際に〈理想郷〉の修辞法という漢詩文のリテラシーが同じく用いられてはいるが、その〈再現〉のモチーフは異なったものであった。関泳煥の〈理想郷〉の使い方は、士大夫の〈経世〉という精神性と、その志を表す手段としての漢詩文の機能性が連動するものである。つまり、彼の漢詩には、士人的エトスと文人的エトスという、朝鮮社会を超えた漢字圏の士大夫の普遍的な精神性が強く反映されている。一方、金得鍊の〈理想郷〉の修辞法には、漢学的な教養を共通の材料としつつも、士大夫層の普遍的な精神性とは異なる思考の反映が看取される。朝鮮社会における、文化の伝達者とも言える訳官の文化的役割と、都市空間を題材として遊戯的な空間として現世を描いた、閭巷人の漢詩観である。二人の〈理想郷〉の使い方相違から、朝鮮後期における漢文脈の多層性や多様性が窺えるのである。

第三章「英文で〈再現〉された西洋」では、漢詩文で書かれた旅行記によるそれとは異なる、英文日記に〈再現〉されている西洋、漢詩文の紀行文や詩集では見られない使節団の様子を考察し、開化期の朝鮮知識人の文化的ダイナミズムを検討した。

尹致昊は、ロシア皇帝ニコライ二世戴冠式の祝賀使節団の英語通訳として同行し、初めてヨーロッパを経験する。尹は、一八八三年から日記を書き続けており、アメリカ留学中の一八八九年一二月からは英語で日記をつけ始めた。この一八九六年のヨーロッパ紀行も英文で書かれている。尹致昊は英文日記で、西洋の近代都市の繁栄を改めて実感し、その光景への驚嘆を繰り返して記している。この洋行を通じて、尹は海外留学期から学んできた西洋文化の歴史や文学にまつわる由緒ある場所を訪ねた感激を記す。また尹は、露館播遷後（一八九六）朝鮮に勢力を伸ばしていたロシアが諸西洋文明国より後進の位置にある文明国であるという印象を持つようになる。

尹致昊は、最初は使節団の通訳を務めるなど、正使関泳煥の信任を得ていた。だが、戴冠式の参加をめぐる意見衝突、ロシア政府との交渉の難航、尹の通訳に対する関の不満などを理由に、結局ロシア語通訳官の金道一キムドイルが通訳となる。

尹致昊と関泳煥との間の衝突と葛藤は、朝鮮知識人における東洋／西洋文化の教養の混在と、その教養による差異の摩擦が可視化されたものとして理解することができる。この文化的摩擦を和解に導く契機も漢字圏の文化に基づいた漢詩贈答であったことは興味深い。要するに、ロシアという異郷にいた朝鮮知識人たちの間でおきた、東洋文化と西洋文化の教養の差異による衝突と反目の経験、そして漢詩を通じて互いを理解し合う共同経験が、この英文で書かれた洋行の記録に〈再現〉されていたのである。

第四章「尹致昊の改革と啓蒙の論理」では、尹致昊が有する儒学的政治思想と近代政治思想が、どのように拮抗し変容していたのか、その思想的連続性とダイナミズムに注目し、開化期におけ

る尹致昊の政治思想の様相とその特徴を明らかにした。具体的には「政府」「教育」「宗教」という尹の思考軸を議論の糸口として、彼の政府改革論と人民啓蒙論を検討し、尹にとっての主権者に関する意識の変化を、士人的な君権概念から市民的な民権概念への移行の一例として示した。初期官吏時代と上海留学期における尹致昊の政治思想は、王が政治の最高決定権を有し、臣下がその主権者の王を補助し正しい政治を行うようにすると同時に、愚かな民を教化して人倫を全うさせ社会秩序を維持することで、民の安泰な生活という仁政の理想を実現することだと要約できる。

当時の朝鮮の状況は、尹致昊の理想とは遙かに異なるものであった。尹は、朝鮮の失政の責任を臣下たちに求めていていた。それは〈士〉である〈臣〉が王の代わりに実際の政治を行う政治的存在だからである。一方、仁政思想において〈民〉は、天理に基づいた君権の正当性を求める存在ではあったが、王の聖恩を受ける存在であり、士の教化の対象であった。民の教化という思考には民が愚かだという愚民観がそこに前提とされていた。

だが、アメリカ留学を通じて、尹致昊は〈新しい民〉の姿を発見する。それは政治的主体としての民の姿である。尹は、アメリカにおける議会による民政や大統領の民選などを経験し、民による政治の可能性を意識するようになる。

尹致昊は、この時期から人民に対する「教育」の必要性を主張する。尹が語るこの「教育」は、民を愚かな存在としてみる点においては、仁政思想における民の教化に類似するものであるが、一方的に安泰な生活が与えられる民を想定するものではなく、民に知識や道徳心や愛国心を持つようにさせ、民自ら国のために主体的に活躍する人民を形成する手段である。

尹致昊にとって朝鮮でのキリスト教の布教が人民啓蒙と教育の要となる。その理由は、尹が、キリスト教に改宗し、キリスト教社会であるアメリカを経験しながら、個人と国の成功において、宗教の重要性とくにキリスト教の有効性を認識したからである。尹は、こうした宗教の有効性を問う眼差しを持つようになり、今までの彼自身の思想的根拠となった儒教を、無効の宗教として否定し、その思想的根拠をキリスト教に求めるようになる。これは儒教からキリスト教へという尹の思想的な変容として考えることができ、仁政の実現を放棄し、人民主権と西洋文明論の精神的核心を追及することとして捉えることができる。

だが、尹致昊の〈安民〉という発想は、約一〇年間の海外滞在期において消えてなくなったのではなく、ほかの形に変容している。初期官吏時代において仁政の実現を志向した尹致昊にとって〈民〉は、政治の核心的な存在であり、君主の徳治や〈士〉の教化を受ける受動的な存在として認識された。だが、アメリカ留学を通じて、尹は、民の政治的可能性を見出し、民が教育を受けることによって、国政に影響を与える〈人民〉になりうる存在であることに気付くことになる。そして、弱肉強食の原理に基づいた世界秩序において朝鮮の現状を照らし合わせることで、朝鮮という国の独立より、朝鮮の民の生活や教育を優先する改革構想を持つようになった。アメリカ留学期における尹の〈安民〉思想は、民の政治的可能性と西洋文明論が絡み合っただけでなく、

のであり、その後、彼が語る朝鮮の改革構想を支える大きな政治思想的根拠として働き続ける。尹致昊が独立協会の会長を務めた一八九八年において、独立協会は、政府諮問機関だった中樞院を再編し立法機関とする議会設立運動を行う。この立法機関の設置運動の背景には、大韓帝国の宣言後における君権の強化を目にし、朝鮮の政治が「絶対君主制」に帰する可能性のある「深刻な状況」に陥っていたとする、尹致昊をはじめとする独立協会の人々の判断が存在した。尹らは、議会を設立することを通じて、君権を牽制すると同時に、民権に基づいた人民主権の実現を目指すことになったのである。

だが、独立協会が中樞院を議会に改編しようと訴えたのは、上議院の設置であり、一般民衆による民選で構成される下議院を設置することではなかった。下院議会を設置しない理由は、「民」の「知識と学問」のような素養の不足が取り上げられる。尹致昊にとって、民権が与えられた人民とその〈新しい民〉による「民国」は、あくまでも朝鮮の〈現状〉からは離れた理想型である。尹にとって「民権」に基づいた「民国」の実現は、「民」の素養を培うこと、とくに「教育」による民の公共心や愛国心などの個人倫理を向上させることで成就できるものであったのだ。

第五章「尹致昊の啓蒙思想とキリスト教的自由」では、尹致昊の啓蒙思想を、明治期の啓蒙知識人福沢諭吉の政治思想と比較して論じた。本章では尹致昊の自由観はキリスト教信仰に基づいたと仮定し、尹致昊と福沢諭吉の宗教観と自由観を分析することを通じて、その観点の同一性と差異、そして彼らの思考を可能とした政治的想像力を明らかにした。

尹致昊と福沢諭吉は西洋文明を手本として人民啓蒙を主張し実践し、近代化を進めた人物たちである。その思想的基盤は自由なる個人と社会・国家との関係性を前提とした自由主義的政治思想である。

尹致昊と福沢諭吉が唱える文明論には自然状態から自由になった人間という認識が前提される。だが、この二人は人間の自由を可能とするものに対する理解が異なった。「宗教の外に逍遙」する態度を一生貫いて宗教的信仰に一線を引いていた福沢は、人間の「智力」による「精神の自由」に重点を置いていた。尹も福沢と同様に、人間の知性を重視したが、信仰に基づいたキリスト教的自由と救済を念頭に置いて文明論を語った。

尹致昊は朝鮮人が適者となるためには、キリスト教が絶対的条件であると考えていた。福沢諭吉は宗教の信仰の問題に対しては否定的な立場を固守したが、国家と社会の発展のための宗教の効用性という功利主義的態度を一生涯持ち続けた。尹は西洋文明とキリスト教の暗面を認識しながらも、キリスト教と文明に対する彼の信仰により、文明論を相対化することができなかった。福沢もまた西洋文明を絶対的命題として認識し肯定する信仰的態度を持ち続けて文明論を主張した。

尹致昊と福沢諭吉には宗教の信仰に対する根本的な認識の差異が存在したが、この東アジアの二人の知識人たちは、ともに宗教を人民啓蒙の手段として捉えていた。この宗教に対する功利主義的な認識の基層には、文明論・ナショナリズムなどが複雑に絡んでいる。そしてこの功利主義

的宗教観の基層には、神（文明、国家）などと個人の関係に基づいたものとしての個人の内面化および人格化された近代的信仰という政治的想像力が働いている。それ故、東アジアにおける知識人と宗教との関わり、とくに近代的信仰が媒体となったキリスト教の東アジアへの流入の問題を、個人の自由という政治的想像力を可能とした宗教的想像力の流入と転用の事例として理解することができる。本章では、尹致昊と福沢諭吉の政治思想の比較分析を通じて、このような近代東アジアの自由という政治的な想像力と、信仰という宗教的想像力が相互に連動し作動する思想的系譜の一例を示した。

第六章「朝鮮開化期の民会活動と『議会通用規則』」では、「議会通用規則」の翻訳様相とテキストの流通に関する検討を通じて、尹致昊の翻訳の意図と「議会通用規則」の民会の組織と運営のための指南書という性格を明らかにした。

尹致昊は、一八九七年七月から独立協会に参加し、討論会と演説会の導入を通じて、協会を政治団体へ変化させた。彼は討論会を組織して実務的な次元で協会組織を変えただけでなく、アメリカ海軍将校のロバート（H. M. Robert）の『Pocket Manual of Rules of Order for Deliberative Assemblies』（一八七六、通称 *Robert's Rules of Order*）を抄訳した『議会通用規則』（一八九八）を通じて西洋の討論文化を紹介した。

一八九八年四月一二日付『独立新聞』に『議会通用規則』についての広告がはじめて登場するが、翌九九年には広告が紙面から消える。その後、『議会通用規則』の販売広告は、日露戦争を経て大韓帝国が日本の保護国となった翌一九〇六年五月三一日付『皇城新聞』に再び登場し、『大韓自強会月報』への転載など、年を重ねて『大韓毎日申報』と『皇城新聞』に再登場した。このように、この時期に『議会通用規則』の販売および流通の痕跡が多数の紙面に見られるのは、一九〇五年に締結された第二次日韓協約（乙巳條約）によって政治的な問題を取り扱う討論会や演説会のような民会に対する大韓帝国政府の統制力の弱化と、この時期前後における保護国状況の打開あるいは利用のための、韓国の知識人たちによる民会組織の活性化という歴史的な背景があったからである。

*Robert's Rules of Order* は、永峰秀樹によって訳された『官民議場必携』（一八八〇）の形で明治日本に紹介された。『官民議場必携』には、細川潤次郎の「序」が付いているが、ここには「公共之事」を「成俗」していかない日本人という視線が見られ、尹致昊の視線もまたそれに類似するものである。『官民議場必携』の翻訳には、訳者の判断を最大限に排除し、原文の情報を正確に伝えようとする意図が見える。だが、『議会通用規則』は、『官民議場必携』とは異なり、訳者尹致昊の判断によって必要な部分のみが取捨選択され訳されている。

『議会通用規則』の翻訳の主眼は、民会の設立に関する方法、その会を通じての議案提出および票決などの議事決定や、役員や会員や委員の選出や役割や権限や処罰などの民会運営に置かれていた。『議会通用規則』というテキストの翻訳は、民会という〈小社会〉に参加する会員たちに、その組織や運営と合理的な議事決定の過程を理解・学習させることを一次的な目標とした。

しかし、この『議会通用規則』における啓蒙のプロジェクトの最終的な目標は、朝鮮人に〈大社会／国家〉としての朝鮮の運営原理とその構成員としての役割と倫理を理解・実践させるために訳されたことにある。翻訳されたテキストである『議会通用規則』は公共的な議事決定という文化の翻訳であり指南書だったのである。

第七章「自助論の政治的想像力と三・一運動」では、一九一〇年代の尹致昊と崔南善の事例を検討し、植民地という状況において、自助論がどのような政治的想像力として働いたのかを明らかにした。まず一九一〇年代の尹致昊と植民地統治権力の関係性を、暴力性に基づいた緊張関係として理解し、被植民者の安全保障の問題として論じた。そして、一九一八年に『自助論』を訳し、翌一九一九年に「己未独立宣言書」を起草した崔南善に注目し、崔の自助論的思想が、三・一運動の政治的想像力にどのように関連していたかを検討した。本章では一九一〇年代後半のこの二人の朝鮮知識人が持つ自助論を比較し、自助論の現実主義的かつ理想主義的な性質という両面性が植民地朝鮮にどのように作用していたのかを示した。

まず一九一〇年代後半の尹致昊の植民地統治権力との関係性を問題として自助論がどのように現実主義的な論理として作用したのかを検討した。尹致昊は、朝鮮の独立を主張し三・一運動に参加した朝鮮人たちと、この抗日運動に対する植民地統治権力の対応、これらすべてに批判的な態度を見せる。その理由は、尹の自由主義的思想、とくに彼の現実主義的自助論が朝鮮独立不能論を主張する根拠となると同時に、朝鮮の権益を保障しない植民地統治権力を批判する根拠として働くからである。植民地期の朝鮮人の安全保障に対する尹の追求は、現実主義的自助論と自由主義の政治思想に基づいた枠内のものであり、現実主義的自助論は、植民地という現状を受け入れて、その枠内で思考しようとする論理として作用する。

次に一九一〇年代の崔南善の思想と活動を通じて、自助論が理想主義に基づいた政治的想像力としてどのように作用したのかを検討した。崔が起草した「己未独立宣言書」において、彼の自助論的な思想が見られる。三・一運動が起る前年である一九一八年に出版された『自助論』でその根拠を確認することができる。『自助論』において「自助」とは、「自主・自立」し他人に頼らないことを意味し、『自助論』の内容は、個々人の「人」の自助を通じて「国家」の富強はもちろん「文明」を成し遂げるという主張として要約できる。こうした崔南善の自助論的な思想は、彼が起草した「己未独立宣言書」に個人の自由という普遍性に基づいた理想的な論理として作用した。

結局、現実世界において三・一運動は失敗に終わり、その運動の政治的想像力を提供した理想主義的自助論は、一九一〇年代朝鮮の知識人たちが、植民地という現状を容認する論理として転化する。植民地という状況のなかで、朝鮮知識人たちは、自身たちひいては朝鮮人たちを啓蒙し、自助・自立する必要性を唱えるが、彼らの思想を支える根拠の一つとして自助論の政治的想像力が働いた。朝鮮知識人が持つ自助論は、尹致昊のように、植民地という現状を受け入れる現実主義的な論理として働くようになったのである。